

改訂版の序に寄せて

2007年7月に初版を発行し早くも4年が過ぎようとしている。その間多くの方々にご支援いただき本書を使用していただいた。羊土社の編集部からこちらで改訂版を出してはどうかという相談を受けた。学問は目覚ましいスピードで発展している。臨床栄養学の分野でもしかり、初版のころ本邦では未だ多くの急性期医療の栄養管理において完全静脈栄養 (total parenteral nutrition : TPN) が主体であったが、最近次第に早期経腸栄養法の考え方が主流を占めてきた。それには日本静脈経腸栄養学会 (JSPEN)、日本外科代謝栄養学会やその他の研究会において定期的に行われている研修会も大いに寄与している。また、インターネットの活用も広く普及し、学会が独自に教育用のホームページを公開するなど、多数の若い人々が新しい知見に接する機会が多くなった。

本邦でもNSTが普及し、全国で2011年4月現在1,500余の施設がJSPENの登録施設となっている。さらに診療報酬についても、2006年の「栄養管理実施加算」に加えて、2010年に「栄養サポートチーム加算」が新設され、ますます栄養管理の重要性が認められてきた。

改訂版では初版の内容をもとに新しい知見を加えていただき、さらに新規に周術期の栄養管理について「ERAS (enhanced recovery after surgery)」を、そのほか「がん患者の栄養管理」および「がん患者の食事」そして胃瘻の管理では最近急速に開発が進んだ「半固形化栄養剤」を中心に胃瘻からの栄養剤注入についての記載を追加した。さらに、「日本人の食事摂取基準2010年版」がでたので、これに対する解説もお願いした。

ERASは術後できるだけ早い回復を目的にして、各分野の専門家が同じコンセンサスを持って患者管理を行うまさしくチーム医療の最たるものである。2000年頃から結腸切除術後の管理において、デンマークを中心としたヨーロッパで始まったもので、未だ本邦では成書に載せるには早すぎはしないかとも考えられたが、あえてこの章を追加した。

また、多くの執筆者にはこの5年間で得られた知見を加えてそれぞれの項で改訂をしていただいた。末尾には付録として現在の栄養管理に関する診療報酬についても解説を記載していただいた。

臨床栄養に関する成書はあまたあるが、基礎から臨床まで、さらに診療報酬などすべてを網羅した成書はほかにないと考え改訂版を編集した。臨床の現場で栄養管理に携わるより多くの方にご活用いただくことを心より願っている。

2011年6月

編者を代表して
大熊利忠